

戦中少年と遅すぎた帰還兵たち

谷口 茂

1. さまざまな戦後60年

平成17(2005)年は戦後60年ということで年明けからマスメディアが戦中戦後の回顧番組を繰り出してきました。とりわけ首相の靖国参拝が物議を醸し、国際関係に多大の影響を及ぼしていることもあって、靖国問題を扱った書物が昔風に言えば洛陽の紙価を高めました。四人いた兄たちのなかで最も好きだった次兄の戦死(昭和18年初冬)という凶報が我が家を襲った日から62年たちましたが、そのときの衝撃の後遺症からいまだに完全には解放されていない身として、この問題については数々の思いがあります。しかし今回書きたいのはこの件ではなく、数奇な運命の波に翻弄されて、凄絶な戦中戦後体験をした二人の帰還兵に対する、戦中少年の複雑微妙な感懐ですので、靖国問題は割愛します。

2. 小野田少尉の帰還

小野田さんがフィリピンのルバング島でようやく投降したのは昭和49年のことでした。その数年前から彼ら三人がゲリラ戦で現地人だけでなく軍隊まで悩まし、日本の救助団の努力が一向に実を結ばない様子は、マスコミをしばしば賑わしていました。それより一年前にグアム島で逃亡生活を続けていた横井軍曹が島民に捕らえられ、帰還するという事件があったとき、これが最後であればいいのに、まだ敗戦を信じないで戦っている兵隊たちがいるん

だからと、国民の大多数は同情よりも「もうんざりだ」といった厭悪感に浸されていたように思います。

話がさらに遡りますが、ブラジルの日系人の間で「勝ち組」と「負け組」との対立が流血の抗争へエスカレートしたニュースも、戦前戦中の暗い重苦しい世相や、平素は忘れていた往時の自分の心境を思い出させました。横井さんの帰国第一声「恥ずかしながら帰って参りました！」が笑い話の種になったのは随分たってからで、その当時は終戦の折に日本人の殆どが苦渋のうちに味わった敗北感の強烈な再現だったのです。ところが小野田さんは戦っていたのです、一人また一人と部下を喪っても意気はますます軒昂と言わんばかりに。なぜ？

彼が周知のドラマティックな経緯をへて帰還したとき、私は心からの慶福の念を覚えました。ただ、まるで飢えた山犬のようなその陰しい目付きには、無理もないと理解できるものの、何か異様な感じがしました。当時の日記帳で探してみると、こんなことを書いています。“その一本気な性格は嫌いではないがその思想と行動については、軍国主義の犠牲者として同情しつつも、あまりにも狂信的で偏った軍国主義的な確信および直情径行には、批判というよりは不可解感そして嫌悪や恐怖すら覚える云々”。

3. 小野田さんと戦後日本

帰国した小野田さんは毀誉褒貶の十字砲

火に包まれました。信念の人・精神の強者として英雄視する人びともおれば、忌まわしい軍国主義の亡霊として嫌悪する人たちもいて、マスコミには絶好の餌食にされました。私はどちら側にも与することはできませんでした。時代の寵児ともて映やす風潮は、戦後に共産党の非転向派が喝采を博した情景を思い出させ、相も変わらぬ情緒的精神主義に今更ながら愛想が尽きる思いがしましたし、一方幼いながら戦争を体験してその特異な時代相を骨身にしみてよく知っている人間として、その非難はあまりにも酷で、そういう人びとには自身に顧みて深い理解と憐憫の情とを請いたいものだと思いました。

4. 日本脱出と日本復帰

二年後小野田さんはブラジルへ移住しました。時代錯誤者とか恥曝しなどの悪口だけならまだしも、戦友殺しの罪滅ぼしに自決せよといった脅迫じみた非難まで突きつけられては、とても居た堪れなかったでしょう。彼はルバン島で新聞やラジオの報道から戦後の変わり様を知識としては認識していたようですが、現実には彼の想像を超え、しかも極端に対照的な扱われ様にとても対処しきれず、身も心も揉みくしゃにされ、せめて生き延びるために緊急避難的に脱出したのだと思います。

私は賢明な身の処し方だと歓迎し、同時に、自分を神輿に担いで利用しようとする勢力とも決別した点に、彼の精神の清潔さを感じました。社会復帰は旨く行かなかったけれども、彼の孤独の戦いの28年が役に立つ新天地を得たのです。痩せた未開地の牧場への開拓は苦勞の連続だったようですが、密林での決死のゲリラ戦と比べれば物の数ではなかった筈です。それにさまざまな人たちの援助があ

り、良き伴侶にも恵まれて、彼の牧場主としての成功を、数年後には時折マスコミが報じるようになりました。それどころか程なく彼は、日本でサバイバル技術を基に青少年の心身を鍛える林間学校の指導者として有名になりました。これこそはまさに彼が望んでいた日本復帰だったのだと思います。

5. 横井さんの日本復帰

気の毒ながら横井さんの場合は全く逆でした。小野田さんとは異なって横井さんの残留は殆ど知られていなかったと記憶しています。それも当然で彼はひたすら逃げ回っていたからです、ただ捕虜になるのが怖くて。腕のよい仕立て屋だった彼の技量が、逃亡生活にあまりにも見事に発揮され、発見されるのを遅らせたのです。彼は竹林に精緻な巣穴住居を構築し、植物の皮の繊維を紡いで布を織り服を縫い、漁網を編んで暮らしていました。

彼が捕まったときの写真はショッキングでした。日本兵が最も恐れていた悲惨な姿、つまり敗残兵そのもので、見る者に敗戦の屈辱感を思い出させずにはおきませんでした。先述した彼の帰国第一声も、彼の真情の表明であればあるほど、それは強烈な皮肉となり鋭い詰問となったのです。彼に寄せられた同情は、いとも簡単に戦後の平和主義の風潮に身を委ねてしまった自身の精神的軽薄さへの羞恥心の反映だったように思います。しかし横井さんにとっても帰還は遅すぎました。

篤実な職人氣質も、あまりにも変わってしまった戦後社会への復帰の障害になったようです。適応が困難なら現状に固執して合理化を計るという開き直りの方法もありますが、これには強引な知的努力が必要なので、インテリでない彼には無理な話です。彼は鬱積した

憤懣が自ら爆発するような形で、職人倫理に依拠した風俗批判を展開しました。これについては賛同する風潮もあって、彼は風変わりな社会評論家として時を得たのですが、所詮その道の人ではなく、賞味期限は長くは続きませんでした。

彼に対する評価は、下がる一方でした。帰国直後は主役でしたが、小野田さんが帰ってきてからは、勿論もはや主役ではなく脇役、むしろ引き立て役でした。芝居で例えれば小野田さんはニヒルで破滅型の二枚目(五右衛門とか机竜之助や眠狂四郎など)、横井さんはどうも鼻屑目に見ても臆病な三枚目です。悪人でも信念を変えない強者を大衆は好み、善人でも逃げ回っている者は嘲笑されます。横井さんは後年国会議員に立候補しました。変わり者の方が受けるポピュリズムの極みの当世なら当選したかもしれませんが、その折は「何を血迷って」といった冷笑的な反応まであって、屈辱の淵に沈みました。その後の暮しは分かりませんし、その死も小さく扱われただけでした。死の間際に彼の脳裡に去来した思いは何だったのでしょか。年齢はかなり違いますが、戦中体験を共有する一人の人間として、私は彼の霊の安からんことを願わずにはいません。

6. 二つのテレビ番組を巡って

戦後60年に因んで放送された多くの番組の中で、私が最も興味を覚えたのは、やはり小野田さんに関するものでした。ある民放のドラマ『小野田少尉 遅すぎた帰還』(1)と、ある作家との対談および映像記録で綴ったNHKドキュメンタリー『小野田少尉』(2)は、私に極限的な戦中戦後体験を伝えて、根源的な思考へ誘う貴重なフィルムでした。以下

順を追って私の感想を、特に敗戦を信じなかった心理的メカニズムと部下の戦死への貴任意識とを中心に、日記から転記することになります。

(1)部下二人とゲリラ活動が続いている生き方は、島民には「山の鬼」と怖れられ蔑まれ、部下たちにも独善と批判される悲慘なものである。彼はなぜこのようにも固く自分の使命を信じていることができたのだろうか。残置謀者に成れた名誉の呪縛は、なぜこのようにも堅固だったのだろうか。その素地は士族の家系の誇りにあるのかもしれない。

父は県会議員であり、母は「生きて虜囚の辱めを受けるな」と、自分が実家から携えてきた守り刀を、中学校(旧制)時代剣道に打ち込んでいた息子に入隊の餞別として譲る。スパイ養成機関の陸軍中野学校に選抜された彼は、ここで特殊戦士としてのエリート意識を植えつけられた。武人の誉れを重んずる家庭での教育の育んだ若木が、ここで成長して花を咲かせたと言えようか。彼が派遣されたルバング島は既に敗色の濃い戦場だったが、大隊長からゲリラ戦を命じられ、「必ず援けにくる」という一言を、あたかも天の約束ででもあるかのように信じ込む。

見習士官の彼は作戦を主導する権限を持たないので、部隊が集団で行動することの非を建言することしかできない。間もなく彼の指摘したように損害が相次ぎ、小隊長まで戦死する。指揮官となった彼は勇躍ゲリラ戦を実施に移す。部隊を少人数に分散して抵抗を続けているうちに密林に追い込まれ、互いの連絡も途絶えたまま敗戦になる。すると他の組はたちまち投降して、気が付いたときは三人になっていてアメリカ軍の姿も消えた。だが彼は動じなかった。

彼は終戦を戦略的な一時的休戦と見なし、

敵を欺いて戦力を蓄え、やがて好機を得て反撃に打って出る計略と認識したのだった。三人になったがゲリラ戦を続けていれば、これは各地で同じように抵抗している戦士たちを勇気づけ、内地の心ある人びとを励まし奮い立たせる筈と考えた。彼のこの自閉的自己正当化は、やがて部下の離反を招来する。まず島田は絶望して掃討軍の射撃の前に無防備の全身を曝して射殺される、というより自殺する。次に小塚は、この戦いの目的は隊長自身の為に他ならないとまで言い放つが、彼の熱意に絆されてか、あるいは島民に損害を与えてきた今となつては投降しても惨殺されるのが落ちと諦めてか、彼と行動をともにするが、やがて射殺される。それでも彼は怯まない。後の述懐から明らかなように、彼にとっては単独の方が作戦も立案し易く行動も敏ということで、まさに残置謀者の面目躍如たりである。

いかなる志操堅固の猛者でも孤独が長く続けば意気沮丧するのが常だが、日本からの救助団の巡邏が皮肉にもその成行きを阻んだ。彼はこれを謀略と信じ、却って確信を強める。彼らがかつて自分に発せられた指令を解除する書類を携えていないからである。この彼の心理は、日本人の誰もが思いも及ばない奇妙なものだった。自分のゲリラ戦に生き甲斐を感じていた彼は、凡そ戦争というものを自分の戦いと関係だけに矮小化していたと言える。外界から遮断された閉鎖空間に住み続けていると、そこが世界の中心と思えるようになるものらしいが、この一種の天動説的世界像に軍国主義的信仰が作用して究極的な価値観を構築し、彼を呪縛していたのだ。

彼をこの魔圏から救い出したのが戦後日本の若者たちの能天気さ加減の代表格といっ

た感じの青年だったことは、小野田少尉の当時の心裡を写し出して興味深い。彼は、いつまでも援けにこない友軍への信頼が揺らぐのを感じ始めていたのかもしれない。その頃の彼は、自分は見限られたのではと疑いだし、それならとますます狂暴に島民を攻撃することで、自分を裏切った軍隊への復讐を生き甲斐にしていたのではなからうか。もはや陰の軍隊など存在しないと悟ったからこそ、指令を解除する指令を要求したのだと思われる。翌年、かつての上官が30年前に発せられた戦闘終了の命令書を直立不動の彼の前で読み上げる。その光景は厳粛にして滑稽かつ鬼気迫る歴史的な場面であった。

(2)このドキュメンタリーは二人の部下を死なせてしまったことについての本人の証言が聞かれ、とても迫力があつた。部下の死に対して彼が抱えているのは悔悟などではなく口惜しさであり、部下の遺族に対する詫びも自分の戦術の誤りであつて、自分の確信のそれではなかつた。責任の全ては軍の指令にあるのだ。これは自己責任を逃れる強弁には違いないが、自尊心を守るための防衛策であり、私は批判はするが非難はしたくない。

彼はその後も自分にあのような戦後を強制したのは軍の論理と組織であつて、自分は忠実に従っただけだと自己正当化を続けた。援助金を靖国神社に奉納したのもその一環であろう。だが部下への贖罪の証しという動機も潜んでいたかもしれない。この推量は私の個人的な願望にすぎないけれども、そのような人間味すら欠くとするならば、あまりにも悲惨で救いがなさすぎるように思う。

7. 終わりに

戦後60年目が50年目のときよりも回顧調を

強めたのは、還暦を祝う習俗のためかもしれませんが。自分の経験からも、来し方を振り返る気になって「本卦歸りを機に新規蒔き直しに何か始めるか」などと殊勝なことを思ったものです。私は何も始めませんでした。マスコミのキャンペーンには真面目な意気込みが感じられました。このところ「靖国」や「天皇制」や「改憲」などが解決を要する急務となっているのも、60年間ただその場凌ぎで済ませる他なく、問題の本質と取り組む余裕のなかったのが、ここへきてようやく態勢が整ったということなのでしょう。

私はこの風潮を基本的に歓迎しますが、いろいろな危惧を抱かざるを得ません。それはこれらの問題がただ単に現象面をあげつらったり、感傷へ誘うだけだったり、政治的駆引きの材料にされるだけで、本質的な深層が相変わらず看過されているのではないかと思うからです。その深層とは、戦前から戦中にかけて日本人を封じ込めていたあの独特の社会的雰囲気の真相に他なりません。これが十分に解明されなければ、あの戦争の意味は永遠に分からなくなるでしょう。近々公開される映画『男たちの大和/YAMATO』にも、情に流され易い民族気質の無批判的称賛が感じられます。宣伝文句を読む限り、これが英霊たちへの鎮魂になるとは到底思えません。知に働く者を疎外し、結果まで見据える冷静な思考を臆病と輕侮して、悲劇的カタルーフの情動に陶醉するのをこよなく好む国民性の構造改革は、百年河清を俟つの徒労かもしれませんが、せめてその問題性を自覚し続けることは可能だし、知識人の基本的責務と思うのです。

以上まことにお恥ずかしい個人的感懷を縷々申し述べました。戦争を知らない皆さんにとって何かの参考になるならば、これに過ぎ

る喜びはありません。